

たくみえこ 田口三枝子は名門女子大の四年生で、高知の山沿いの町から出てきている。

両親ともに教師という家庭に育ち、小さい頃から将来は教師になるのだと思いつまされてきた。ピアノ、硬筆、学習塾と放課後のスケジュールが毎日決まっていて、友達と遊んだ記憶はほとんどない。親が教師だから成績のよいのは当たり前と周りの人から言われ、親からは教師の子供だからもっと良い成績を取らなくてはならないと言われ続けて高校までを過ごしてきた。親の望んだ大学に入り、吉祥寺で一人暮らしを始めたとき、三枝子は初めての解放感を味わった。一カ月に一度出す手紙と、時々かかってくる家から

そうした生活をしているうちに、教師になるという目的がひどく曖昧であることに気が付いた。三枝子が決めたことではなく、すべて親が望んだことである。三枝子は今まで一度も自分から教師になりたいと思つたことはない。

その考えは日が立つうちに、本当は教師になりたくないという考えに変わっていった。それなら何をしたいのかと自分に問いかけてみる。しかし、何も思い浮かんでこない。このことが情けなかった。考えるたびに落ち込んでいった。

そんなとき、牧原健二と知り合った。健二がアルバイトをしていた店に、三枝子がテニス仲間と

らの電話に近況さえ知らせておけばあとはまったくの自由である。三枝子は伸び伸びとした生活をスタートさせた。

本来はスポーツ好きの三枝子だった。それまで勉強が疎かになるからと禁止されていた反動で、入学するとすぐにテニス部に籍を置いた。夕方遅くまでボールを追いかけて汗を流すことが気持ち良く、先輩に怒鳴られたりグラウンドに正座をさせられることも辛くなかった。帰りに気の合う仲間たちと憂さ晴らしと称しての食歩歩きが楽しかった。勉強は年に二回の試験前だけすばらしい。それも、友達といっしょに飲んだり食べたりしながらの徹夜である。毎日

いっしょに通い出し、偶然同じ吉祥寺に住んでいることが分かって親しくなった。

最初は健二のときばきした仕事ぶりに惹かれたのだったが、何度か会って話しているうちに健二が自分の目標に向かって着実に歩いていることを知り、その姿に強く胸を打たれた。健二と付き合うことで、自分も生きる目的を見いだせるかもしれないと思つた。

健二は東北の農家の出身である。

大学進学するとき、父親は健二に向かってこう言った。

「入学金は出してやるが、あとのことは自分でやれ」

農家の次男坊は高校を出るとすぐ働くというのが健二の育った田舎の常識だった。一歳上の兄は隣の県の農業大学にいつているし、妹はまだ中学生。父が役場に勤めて母が細々と田畑をこなしている状態で、両親が一日も早く健二の手を借りたいと思っっていることも分かっていた。

それでも、健二は大学にいきたいと言い張った。長男に生まれたというだけで大切にされている兄と、待ち望んだ女の子だったために甘やかされている妹の間で、健二は中学生の頃から家を出ることだけを考えていた。中学高校と優秀な成績で通したことも自信となつて、進学

健二は一度に三つのアルバイトをこなしたこともある。

ところが二年生の冬に始めた「ベル」というスナックのアルバイトが、いつの間にか本業のようになつてしまった。

クリスマスに合わせてオープンしたことが大いに当つて、「ベル」は年末年始の間ずっと戦争のような忙しさだった。一日も休めないことで他のバイトから不満が出ていたが、正月に帰省する予定のない健二はそのほうがよかつた。一人で正月を過ごすよりはまだ仕事をしていたほうが気も晴れる。

その調子で決まつた休みも取らず働き続けて

の夢を捨てることができなかつた。

何度も両親と言ひ争いを繰り返したあげく、健二はポストンバッグ一つを提げて夜中に家を出ようとした。それを父に見とがめられ健二の進学が許されたのだったが、その代わりに送金はしないと断言されたのである。

吉祥寺は若者向けのスナックやディスコが数えられないくらいあり、アルバイト先を探すのに苦労はなかつた。父の言葉どおり、健二は自分の力で大学生活を送るために眠る間を惜しんで働いた。

大学とは便利なもので、受ける講義を調節さえすれば週のうち三日通うだけで単位が取れる。

一年あまりが過ぎたとき、マスターから夜のマネージャーになつてもらいたいという話があつた。

よく分からぬままに引き受けた仕事だったが、マネージャーという肩書きを貰うと同時に給料は倍近くになり、仕事も楽になつた。バーテンや女の子の手配と、客の相手をしながら店内を見渡していればいいのである。そのうちにマスターがもう一軒店を出して、その店を健二に任せると言う話も出てきていつそやる気を出していった。

昼間は仕事がないと言われたものの、マスターは何かと相談を持ちかけてくる。食器選びについていたり、新しいメニューをいっしょに考え

たりしているうちに健二は大学に行くのが面倒になってきた。

大学を卒業して運よくどこかに就職したとしても、一生誰かの下で働くことになる。それよりも、小さくてもいいから自分の店をもち、一城の主になりたいと考え出したのである。ここで何年か働いて資金をため、それから自分の店を持つと思う。マスターも一つの店で十年間バーテンをして、三十歳になってから独立したのだった。

今、健二は二十七歳。店を持つための資金も順調にたまり、計画より早くに夢が実現しそうだった。

なり、そこで独立して自分の店をもった健二の迎えを待つ。そのときは例え親が反対しても三枝子は健二と結婚する覚悟である。

これが、今の二人が考えて出した結論だった。もし今二人のことが知れてしまえば、三枝子は無理やり故郷に連れ戻されることになり、二人の店を持つという夢も消えてしまう。そうならないために、今は親との争いを起こしたくないのだった。

三枝子の話を聞き終わって、栄子は今まで二人を誤解していたことを恥じた。今現在の生活だけでなく、何年も後のことまでしっかりと考

三枝子は健二といっしょに暮らし始めたことを後悔していない。恋人同士になったとき、同じ町に二つの部屋を借りているのはもつたいないからと三枝子のほうから同棲を提案した。部屋代が要らなくなった分を貯蓄に回せると思ったからである。

それでも三枝子は健二と結婚できるとは思っていない。お互いの気持ちを確かめ合いながらも、結婚となると障害が大きすぎる。三枝子は親の期待を裏切ることが恐かったし健二にしても三枝子の親を相手に争う気力も自信もなかった。しかし、あと半年たてば三枝子は大学を卒業する。一旦は親の期待どおり故郷に帰って教師に

えている。親に隠しているのは心配をかけたくないという気持ちと、自分が決めた生き方を壊されたくないという考えがあるからだ。一生懸命に夢を追いかける若い二人の姿に胸を打たれた。

「それで、牧原さんの荷物はどうするの。私のほうで預かっておきましょうか」

栄子の言葉に、三枝子の顔がパツと明るくなった。

「ありがとうございます。でも、隣の百合さんが預かってくれることになっていんです。無駄遣いしない人だから、健二さんの物って少ないですよ」

「百合さんも協力しているのだから、私もしないわけにはいかないわね。大丈夫よ、安心していなさい。うまくやってあげるから」
三枝子を応援する気持ちが自然と力強い口調になっていた。

「ありがとうございます」

晴れやかな顔で三枝子は部屋を出ていった。

その背中に向かって、栄子は思わず頑張つてと声をかけた。

8

三日間あかつき荘に滞在した三枝子の母親が帰ったあと、健二が三枝子といっしょに管理人室

を訪れた。

「いろいろありがとうございました。おかげで助かりました」

友達のアパートに身を寄せていたという健二は直立不動の姿勢で頭を下げた。

「お母さんからよろしく頼みますって言われたとき、少し後ろめたくて返事に困ったわ。でも、お母さんも安心して帰られたようだし、これでよかったのよね」

「母のいた三日間、ずっと心の中でごめんなさいって謝っていました。その分、いつもより母に優しくできたみたいです」

「三枝子に辛い思いをさせてしまいました。でも

いつかきつと、正々堂々と三枝子の両親に会いに行き、僕たちの結婚を許してもらうつもりです」
顔を見合わせて微笑み会う二人の表情は明るかった。

このあかつき荘で夢と愛を育ててきた二人に幸せな結婚をしてもらいたい。そう思いながら栄子は優しく二人を見守っていた。

(以上12月16日放送分)